武蔵一宮氷川神社　氷　川　雅　楽　会

第 35 回　観月雅楽演奏会

祭祀舞

豊栄舞

「乙女舞」とも称して、臼田甚五郎氏が作詞、東儀和太郎氏(元宮内庁楽部楽長)が作曲作舞され、日本の国の弥栄を願い神社本庁が祭祀舞として制定したものです。楽曲は、越殿楽の今様調であり、一歌・間奏・二歌の三部構成からなっています。

“あけの雲わけうらうらと　　とよさか昇る朝日子を　　神のみかげと拝めば　　その日その日の尊しや„

“地にこぼれし草の実の　　芽ばえて伸びて美しく　　春秋飾る花見れば　　神のめぐみの尊しや„

浦安舞

紀元 2600 年の奉祝が行われた昭和 15 年 11 月 10 日、全国の神社で一斉に奉奏され、それ以来、今でも盛んに奉奏されています。

作曲、振付は宮内庁楽部楽長である多忠朝氏、歌詞は昭和天皇の御製です。

“天地の神にぞいのる　朝なぎの　海のごとくに　波たたぬ世を“

この歌詞の前後に神楽笛の独奏する参入と退出音声とがあります。浦安とは心安らかという意味で、平和を祈る心の舞です。
昔から日本が「浦安の国」といわれたのは、風土が美しく、平和であったからです。
舞に用いる扇は「桧扇」といい、松竹梅は祝いの象徴であり、みな心を一つにして、美しく豊かに開きゆくありかたを物語るものです。
鈴は、美しい音の如く、心と心のふれあいにより賑やかに遊び集い、互いにおおらかに呼びかけあう喜びの心を示すものです。

舞　楽

迦陵頻

加陵頻とは霊山に住む想像上の鳥の名です。頭は人、身体は鳥で聞き飽きる事の美しい声で囀る姿を舞にしたといわれています。
曲は沙陀調で、唐楽の伴奏で舞う左舞です。左舞の特徴である朱色の装束を身にまとい、頭に冠と花を、背には大きな翼を付けて
手にした銅拍子を鳴らしながら舞います。
ベトナムの僧仏哲が天平期に伝えたといわれています。

萬歳楽

左方舞楽の中で緩やかでやわらかい舞振ぶりで平舞の代表的な曲です。隋の煬帝(在位 604~618 年)唐の則天武后などが作らせたという説があります。賢い君主の時代には鳳凰が飛んで来て「賢王万歳」と囀ると云われこの鳴声を曲にその姿を舞に作ったといわれております。
四人舞で装束は赤を基調とした襲装束を着装し赤い袍の右袖を脱ぐ片肩袒で舞うため下襲の袖の紋様が華やかさを強調します。鳳凰をかたどった
鳥甲をかぶり舞います。
即位の礼をはじめ皇室の祝賀の際には必ず演奏される曲です。番舞として延喜楽、地久等とあわせて演奏されます。

納曽利

高麗壹越調、走舞、右舞にあたります。雌雄の二匹の竜が楽しげに遊びあう姿を舞楽化したものであるといわれ、舞人は二人です。
番舞は左舞の「蘭陵王」です。
装束は青地金襴の牟子、紺または緑色の面をつけ、緑色の目と牙を持ち、吊りあごの恐ろしい鬼のような容貌をしております。
そして、桐と唐草の模様の差貫、窠紋のついた黄色の袍、毛べりの裲襠を着て、銀の桴を右手に持って舞います。
古くは競馬の節会に聖馬を迎える際には必ずこの曲を奏しており、また相撲や競馬の節会などで勝負を決する際に、右方が勝てばこの曲を
左方が勝てば「蘭陵王」を舞ったと言われております。

長慶子

平安期雅楽の名手として活躍した源博雅が作曲した名曲です。古くからさまざまな祭事行事で参集者が退場する音楽、退出音声として用いられ
現在でも演奏会の締めくくりの曲として演奏されるのが慣例となっています。